［ 診療補助部 ］

経営支援室(DX創生センター)

室長　小野寺　豊

1 業務体制

理事長・院長・副院長直轄の診療補助部門として、データに基づく病院経営支援・医療支援を担う。DX創生センター（経営支援室＋医療情報システム室＋KIX事務局)の一翼として院内DX推進を担当し、KIX事務局の企画運営管理も担当する。人員配置は専従配置による体制。

●人員構成(2025年4月1日～2026年3月31日)

職員数		2025年度(対前年度)		
2024	2025	増員	減員	差引
2	2	0	0	0

2 業務内容

・経営に関わる各種データ分析及びそれを基にした病院の意思決定支援業務
・病院理念・ビジョン・基本方針に基づく重点課題の立案提示
・診療科別・疾病別各種経営指標の作成
・臨床指標、病院情報公開等ホームページへのデータ公開に関わる広報業務
・適切なDPCデータの厚労省等への提出(重症度、医療・看護必要度データ(Hファイル)含む)
・診療報酬請求適正化(レセプト請求チェック)
・診療科長会議にて月次報告
・DPC特定病院群認定への取り組み
・日本病院会「QIプロジェクト2025」への参加
・DPC管理委員会(適切なコーディングに関する委員会)
・DPC分析ツール「EVE」の運用・管理
・依頼資料(データ)作成による他部署への業務支援
・他部門との業務連携
・「重症度、医療・看護必要度」対策
・経営支援ソフト「ダッシュボードχ」の運用・管理
・院内DX推進への取り組み及びそれに関連する広報業務
・グループ関連からの相談対応業務
・電子カルテ入れ替えに伴うオブザーバー支援としての役割
・電子カルテを活用したdashboard構築

など

3 業務状況

主な業務状況としては下記の通りである。(特に変化があったもの)

・DPC特定病院群WGへの取り組み

2026年度での認定を目指して取り組むも、結果的には次年度での認定には至らなかったが、他の係数としては活きてくるので取り組み自体は有益であった。

次年度でも形式を調整し継続予定。

・院内DX推進への取り組み及びそれに関連する広報業務

KIX活動やDX創生センターとしての活動は継続しており、前年度よりも飛躍できた年でもあった。また今年度は院外へのPR活動にも何か所か赴いた。北海道での全日病学会発表をきっかけに埼玉県にある病院の他、グループ病院へのキントーンを通じた取り組み事例の紹介や広報誌による周知を行った。そして協力業者からも当院の取り組みが評価され、福岡での講演及びディスカッションへ招待され発表及びディスカッションを行った。また北海道学会で発表した内容に関しても、座長推薦を受けて春に論文として雑誌に掲載予定である。

Kintoneのカテゴリーだけでも、各種WEB予約ツール、電話対応軽減ツール、連携ツール、職員QRコード付与など多くの院内のDXを進められた年だった。ただし、運用の属人化・DX人材不足などの課題が生じてしまうため、プロセスの最適化とデジタル文化の醸成が求められる。

またRPAや生成AIにも少し関わっている。

・電子カルテ更新に伴うオブザーバー支援としての役割

今回の入れ替えの際の主担当は外れたが、各種チームの会に適宜オブザーバーとして参加し、適宜アドバイスや提案を行いつつ進めていった。マスタ設定の不備などのトラブルにも対応。

・電子カルテを活用したdashboard構築

電子カルテの入れ替えにて新たに可能となった部分で、dashboardとして構築した。表示内容としては出せるものに限られるが、経営的に必要な指標・DPCに関する指標等を可視化させた。

4 特に力を入れたこと

＜BSC2025達成項目＞

・電子カルテ内のdashboard完成
・地域連携アプリ、WEB予約センターのアプリ完成
・学会発表及び外部研修への参加
・有給休暇の消化促進
・時間外業務の削減
・キントーンアプリの作成

＜BSC2025未達成項目＞

・なし

＜他項目として＞

・菊名のDX取り組みが外部から高く評価され、広く周知できた
・特定病院群認定への取り組みが係数UPに寄与

5 今後の課題

・経営支援とDX支援の両輪をさらに強化し、相乗効果を生む取り組みを進める。
・慢性的な人材不足の中で、業務の選別と優先順位付けが必要。
・診療報酬改定年度に向け、急性期機能維持に注力していく。
・特に病病連携（病院×病院）が重要となるため、KIXの取り組みと連動して推進する。